

病害虫発生予報 第1号（4月予報）

和歌山県農作物病害虫防除所

< 予報の概要 >

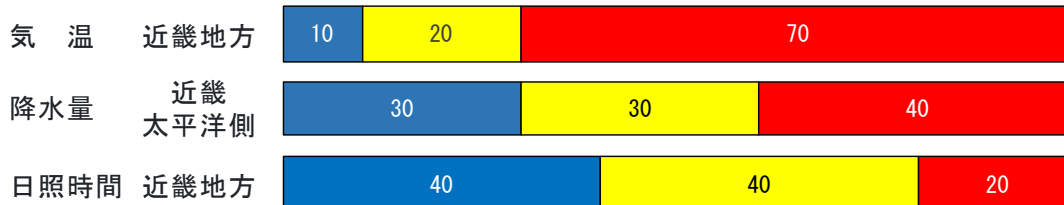
作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ	並多	野菜全般	灰色かび病 アザミウマ類	並並
タマネギ	白色疫病 べと病	やや少 やや多	カンキツ	かいよう病 そうか病	並並
エンドウ	褐紋病 うどんこ病	やや少 並		ミカンハダニ	やや多
キャベツ	コナガ	並	カキ	うどんこ病	並
キュウリ	べと病 褐斑病 タバココナジラミ ミナミキイロアザミウマ	やや多 少 やや多 やや多	ウメ	かいよう病	並
			果樹全般	カメムシ類	やや少

気象予報

近畿地方 1か月予報（03/25～04/24）

2023年03月23日14時30分 大阪管区気象台 発表		
向こう1か月 03/25～04/24	天候	天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率70%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。
1週目 03/25～03/31	気温	1週目は、高い確率60%です。
2週目 04/01～04/07	気温	2週目は、高い確率70%です。
3～4週目 04/08～04/21	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）



低い（少ない）
 平年並
 高い（多い）

- ① 県北部での3月中旬の越年罹病株の発生ほ場率は13%（平成9%）、発病株率は0.2%（平成0.1%）であった。二次感染株の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率7%、発病株率0.1%）であった。
- ② 4月の気象予報による
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 前年の発生が多かったほ場では、本年も発生しやすいので注意する。
 - ② 本病は、気温15℃前後で曇雨天が続くと多発する。
 - ③ ほ場をこまめに見回り、越年罹病株の早期発見と抜き取りを徹底する。二次感染株を確認した場合は発病葉を除去する。抜き取った株や発病葉は袋に入れ、ほ場の外に持ち出して適切に処分する。
 - ④ 越年罹病株や二次感染株が認められた場合は、早急に薬剤散布を行う。発生が認められないほ場においても孢子飛散による感染拡大を防ぐため、予防散布を徹底する。
 - ⑤ 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、複数系統の薬剤によるローテーション散布を行う。
 - ⑥ 排水を良好にし、降雨による浸冠水や停滞水をなくす。
 - ⑦ 令和4年度病害虫防除技術情報第5号（令和5年3月20日発表）を参照する。

<エンドウ>

1. 褐紋病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の露地栽培における3月中旬の発生ほ場率は8%（平成27%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 雨が多いと多発するので薬剤散布は早めに行う。
 - ② 多湿条件で発病が助長されるので、排水対策や通風対策に努める。

2. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の露地栽培での3月中旬の発生ほ場率は0%（平成3%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 発生初期から薬剤防除を行う。

<キャベツ>

1. コナガ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部での3月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率3%、1株当たり発生密度0.0頭）であった。
 - ② フェロモントラップによる3月1～20日の誘殺数は、和歌山市6頭（平成21.3頭）、紀の川市1頭（平成5.3頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① ジアミド系、IGR剤などの薬剤は殺虫効果の低下が認められている。
 - ② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統の薬剤は連用しない。

＜キュウリ＞

1. ベと病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部での3月下旬の発生ほ場率は39%（過去9年の平均29%）、発病葉率は11.5%（過去9年の平均6.0%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 多発すると防除が難しくなるため、初期防除を徹底する。
 - ② 病原菌は気孔から侵入するので、薬液は葉の表裏にムラなくかかるように散布する。
 - ③ 肥効が低下したり草勢が衰えたりすると発病が助長されるので、適切な肥培管理に努める。
 - ④ 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、複数系統の薬剤のローテーション散布を行う。

2. 褐斑病

- (1) 予報内容 発生量 少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部での3月下旬の発生ほ場率は0%（過去9年の平均：発生ほ場率33%、発病葉率5.4%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 多発すると防除が難しくなるため、初期防除を徹底する。
 - ② 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、複数系統の薬剤のローテーション散布を行う。
 - ③ ボスカリド剤、チオファネートメチル剤、アゾキシストロビン剤に対する感受性低下菌が認められている。

3. タバココナジラミ

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部での3月中旬の発生ほ場率は60%（過去9年の平均29%）、生息葉率は9.9%（過去9年の平均2.3%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① タバココナジラミはウリ類退緑黄化ウイルスを媒介する。
 - ② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

4. ミナミキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部での3月中旬の発生ほ場率は33%（過去9年の平均14%）、生息葉率は3.3%（過去9年の平均1.2%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 気温の上昇とともに発生が増加するので、発生初期に防除する。多発ほ場では追加防除を行う。
 - ② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

<野菜全般>

1. 灰色かび病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部の施設栽培キュウリでの3月下旬の発生ほ場率は0%（平成27年の平均4%）であった。

② 県中部の施設栽培ミニトマトでの3月中旬の発生ほ場率は0%（過去7年の平均4%）であった。

③ 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設の湿度低下を図り、過灌水や滞水しないように注意する。

② 発病部位を除去し、発病初期から薬剤防除を行う。

③ 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、複数系統の薬剤のローテーション散布を行う。

2. アザミウマ類（ミナミキイロアザミウマを除く）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培イチゴでの3月中旬の発生ほ場率は、ヒラズハナアザミウマ11%（過去7年の平均10%）、ミカンキイロアザミウマ11%（平成27年0%）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリでの3月中旬の発生ほ場率は、ミカンキイロアザミウマ0%（過去9年の平均3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 気温の上昇とともに発生が増加するので、発生初期に防除する。多発ほ場では追加防除を行う。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. かいよう病

(1) 予報内容 初発日 やや早

発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）の3月中旬における春葉の越冬病斑の発病葉率は15.3%（平成27年9.5%）であった。

② 前年10月中旬の県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における春葉発病の発生ほ場率は19%（平成27年19%）、発病葉率は0.5%（平成27年0.5%）であった。

③ 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 罹病性品種植栽ほ場や常発ほ場では、伝染源となる罹病枝葉の剪除や防風施設の整備に努めるとともに、新梢伸長期に銅水和剤（薬害軽減のための措置を講じる）を散布する。

2. そうか病

(1) 予報内容 発生時期 やや早

発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 前年10月中旬の県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）におけるウンシュウミカンの果実発病の発生ほ場率は5%（平成4%）であった。
- ② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 常発ほ場や前年多発ほ場では、伝染源となる罹病葉の除去、発芽直後の薬剤防除に努める。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（有田川町奥）における3月中旬の発生葉率は、無防除区9.0%（平成4.1%）、マシン油乳剤を散布している慣行防除区0%（平成0%）であった。
- ② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ミカンハダニの防除は、12月下旬～1月上旬または3月中下旬、6月下旬のマシン油乳剤の散布、9月の化学合成殺ダニ剤の散布を基本とする。
- ② 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統の薬剤は年間に2回以上使用しない。

<カ キ>

1. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 前年10月中旬の「富有」の発生ほ場率は65%（平成79%）、発病葉率は10.0%（平成19.1%）であった。
- ② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 子のう胞子飛散最盛期は4月下旬～5月上旬であり、この時期に水和硫黄剤を散布する。前年多発したほ場では、この時期の防除を徹底する。
- ② 4～5月に降水量が少なく、乾燥気味に経過すると発病が助長される。
- ③ 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、薬液は葉裏をねらって丁寧に散布する。

<ウ メ>

1. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 3月上中旬の予察ほ場（無防除、みなべ町東本庄）での2年生枝の潜伏越冬病斑形成枝率は0%（過去6年の平均1.1%）であった。
- ② 県南部（みなべ町、田辺市）の前年6月上旬の発生ほ場率は44%（平成47%）、発病果率は1.0%（平成1.8%）であった。
- ③ 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 強風雨により感染が助長されるため、常発ほ場では防風施設の整備等の防風対策を励行する。

- ② 生育期の薬剤防除は、発芽期からほぼ10日おきに数回、抗生物質剤を散布する。強風雨直前の散布で、より高い効果が得られる。

<果樹全般>

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県内47地点のチャバネアオカメムシ越冬成虫の捕獲頭数は落葉50リットル当たり0.0頭(前年0.3頭、平年0.5頭)、捕獲地点率は2.1%(前年21.7%、平年21.1%)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量はほ場間差が大きいため、ほ場内での発生及び被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ② ウメ、モモなどでは、収穫前に越冬成虫の飛来が確認された場合は速やかに薬剤による防除を実施する。
- ③ ウメの被害は品種間差が大きいため、小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるため、これらの品種では特に注意が必要である。
- ④ カンキツでは蕾、花が加害されるため、被害が認められた場合は薬剤による防除を行う。
- ⑤ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所の果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○ **農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ** <農作物病虫害防除所>

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○ **和歌山県ホームページ** <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所(紀の川市、農業試験場内)

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在(有田川町、果樹試験場内)

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在(紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内)

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在(みなべ町、果樹試験場うめ研究所内)

TEL 0739-74-3780